

# 水

## のヒストリー

### 水と暮らしのうつりかわり

琵琶湖と淀川は昔からわたしたちの暮らしと産業にとって大切な水源でした。交通の発達していなかった時代は、水上交通路としても大いに活用され、近代になってからは発電などにも用いられるようになりました。今その役割はゆたかな暮らしと発展を続ける産業を支えるために、ますます重要になっています。それだけに、渇水への対策は琵琶湖、淀川流域の人々みんなの問題といえるでしょう。年表を見ながら、わたしたちと水の関係について、もう一度考えてみませんか。

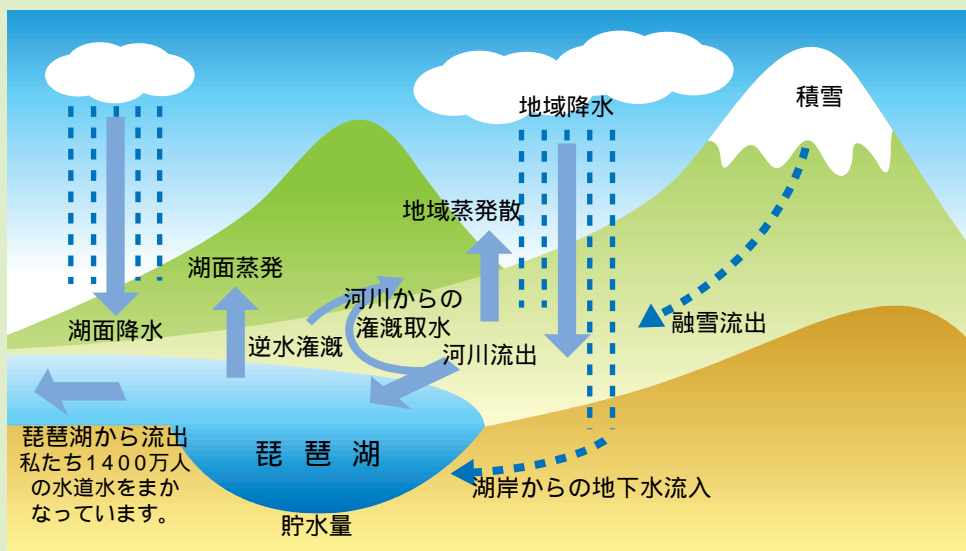
中世	北国の米、琵琶湖、淀川の水運を利用して各地に運ばれる。
江戸時代中期	琵琶湖を数千隻の船が往来。大津に13の関（荷揚げ場）が並ぶ。
明治2年（1869）	大津～海津間の連絡船一番丸が就航。
明治23年（1890）	琵琶湖第一疎水、インクライン（傾斜鉄道）完成。
明治27年（1894）	琵琶湖に湖上遊覧船が就航。
明治28年（1895）	大阪市上水道完成。
明治38年（1905）	南郷洗堰完成。
明治45年（1912）	琵琶湖第二疎水完成。
大正2年（1913）	宇治川発電所完成。
大正14年（1925）	大津柳ヶ崎水泳場開設。
昭和14年（1939）	渇水で琵琶湖の水位マイナス103センチを記録。
昭和15年（1940）	瀬田町で琵琶湖からの逆水灌漑に成功。
昭和36年（1961）	瀬田川洗堰完成。
昭和39年（1964）	天ヶ瀬ダム完成。
昭和60年（1985）	渇水で琵琶湖の水位マイナス95センチを記録。
平成4年（1992）	瀬田川洗堰バイパス水路完成。
平成6年（1994）	渇水で琵琶湖の水位史上最低のマイナス123センチを記録。
平成9年（1997）	琵琶湖総合開発事業、終了。 利水とともに治水、保全の3つを柱に、事業は実施されました。

# 水

## のキーワード

### 自然を循環する琵琶湖の水

どんな資源にも限りがあるように、琵琶湖、淀川のゆたかな水も使いすぎれば足りなくなってしまいます。わたしたちの飲み水や、作物を育てる水、工場で使う水なども、琵琶湖と淀川、そしてそのまわりの自然の中を循環している水の一部です。今回はその大きな水の流れをとらえて、水の大切さを考えてみましょう。



#### 水循環とわたしたち

海や地表から蒸発した水は雲になり、雨や雪になって地上に降り、河川や地下水をとらえて再び海に流れ込みます。琵琶湖や周辺（流域）に降った雨や雪は、瀬田川（淀川）や琵琶湖疏水の流れで、大阪湾にたどりつきます。琵琶湖の湖面からも毎日たくさんの水が蒸発し、地上から蒸発した水分といっしょに雨を降らす雲になります。こうして水はさまざまに姿を変え、自然の中をめぐっています。わたしたちは自然の中を循環する水を取り込んで利用し、下水道などを通じて川や海に流しています。わたしたちもまた水循環と深いかわりを持っています。